

右向けと言われれば右を向き
左といわれれば左
死ねといわれれば死ぬ
おれはもうそういう日本人には
なりたくねえんだ。



朗読劇

線量計が鳴る

元・原発技術者のモノローグ

脚本・出演 中村敦夫

2020年

1月19日(日) 13:30開演 (13:00開場)

厚木市文化会館小ホール

前売券：一般2000円 学生・障がい者1000円

当日券：一般2500円 学生・障がい者1500円

チケット取扱

厚木市文化会館（チケット予約センター 電話046-224-9999）

有隣堂厚木店（厚木市中町2-6 電話046-223-4111）

せいきょうあつぎ診療所（厚木市水引2-8-29 電話046-223-3325）

晴れ屋（厚木市中町2-8-6中町ビル2F 電話046-295-1161）

- 電話でのお問い合わせ
080-3423-1797（市川）
080-1010-4759（遠藤）
080-5091-8844（落合）
- メールでのお問い合わせ
mutsuko-endou@ayu.ne.jp

主催：朗読劇「線量計が鳴る」厚木上演実行委員会（実行委員長 市川隆雄）

協力：なくそう原発あつぎの会 一般社団法人あつぎ市民発電所 あつぎ環境市民の会 厚木市九条の会ネットワーク

せいきょうあつぎ診療所 厚木YMCA カトリック厚木教会

朗読劇

「線量計が鳴る」まえがきから

中村敦夫（俳優・作家）

誰だって、晩年は静かに暮らしたいと思うだろう。私も読書や執筆、仏教研究などで、ゆったりとした時間を味わいたいと思っていた。

二〇一一年の福島第一原発事故は、そんなささやかな一老人の希望を、一瞬で打ち砕いてくれた。深い眠りを破る非常ベルの襲撃のようだった。

これまで、私はエコロジストを自認してきたし、原発の危険に関しても論及してきた。しかし、正直なところ、自分の生きている間に、小中学校時代を過ごした土地で、大型原発事故が実際に起きるとは想像もしていなかった。

原発事故は戦争に匹敵する大惨劇である。

表現者として、頭脳が回転しているかぎり、だんま

りを決め込むわけにはいかない。それは、卑怯というものである。では何ができるか？

「エネルギーを制する者が、世界を制する」時代が続いてきた。その中で、原発は最高位の権力を謳歌してきた。「核の平和利用」というスローガンで、世界中を「安全神話」のペンキで塗りたくり、反原発派を社会の表面から追放してきた。

マスコミは大スポンサーである電力会社に忖度し、反原発の言論を神経質にチェックする。日本は「報道の自由」「世界ランキングで、七十何位という不名誉な評価を受けている。まさに報道統制国家である。

この境遇の中で、表現者が「真実」を披露するのはかなり困難である。

一方で、原発事故以後の

半年間くらいは、虚実もろとも、膨大な情報が世の中にあふれ出たのも事実である。しかし、あまりの分量とジャンルの広さ。専門性の高い資料なども無秩序に流出し、一般の人々が、面喰らったままの時間が過ぎていくような気がした。これでは、すべてが謎々みたいになっちゃうと思った。

私は、複雑な情報を整理し、材料を取捨選択し、原発の抱える本質的な問題と構造が、誰にでもわかりやすく見えるような作品を書こうと決意した。

一番単純で、力強い表現手段。一人で書き、一人で演じる。言葉だけが武器のプロテスト・シアター。そこには誰も阻止できない真正銘の自由がある。つまり、究極、朗読劇というスタイルを選んだ。

こうして私は原発という巨大テーマに、素手で立ち向かうことになった。

中村敦夫

（なかむら あつお）

俳優、作家、日本ペンクラブ理事・環境委員、元参議院議員。1940年東京生まれ。幼少期に福島に疎開。東京外語大在学中、演劇に興味を持ち大学を中退。劇団俳優座に入る。1972年放映の「木枯し紋次郎」が空前のブームとなり、数多くのドラマで主演をつとめる。海外取材を基に書いた小説がベストセラーになり、情報番組のキャスターに起用される。1998年、参議院東京選挙区から立候補して当選。2000年、「さきがけ」代表に就任。2002年には党名を「みどりの会議」に変え、日本最初の環境政党を作ろうと全国の組織化に奔走。

2007年から3年間、同志社大学大学院・総合政策科学研究科で講師を勤め、環境社会学を講義。2012年には日本ペンクラブのチェルノブイリ視察団に参加。2017年より自作の朗読劇「線量計が鳴る」で全国を公演中。



厚木市文化会館

厚木市恩名1-9-20（電話046-225-2588）

小田急線本厚木駅下車徒歩13分

